

## 二〇一九年度大学入試センター試験 解説 〈現代文〉

第1問 評論 沼野充義ぬまの みつよし「翻訳をめぐる七つの非実践的な断章」による

## 〔総括〕

第一問の評論は、「翻訳」のあり方や難しさについて、個人的体験に基づき随想調に論じている平易な文章で、昨年よりも分量が一割程度減った(約四六〇〇字→約四二〇〇字)こともあり、比較的時間を取られず読解できたはずだ。

設問としては、昨年のような図(写真)に絡むものは出題されなかったが、昨年に続く会話形式問題の問5において、五人の生徒が話し合っている中で「本文の趣旨と異なる発言」を選ぶ問題が出題された。

問1で漢字、問2～問5で内容読解、問6で文の表現と構成を問う、という設問構成は例年と同じものだが、問6の(i)では「適当でないもの」、(ii)では文章の構成に関して「適当なもの」を選ぶ問題が出題されたので、注意が必要である。

## 〔解説〕

## 問1 漢字問題 基礎～標準

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、それぞれ選べ。

(ア)の「丹念」は「心をこめて丁寧に行うこと」の意。正解の「丹精」も似た意味である。(ウ)は「響(く)」という「訓」の漢字を「音」で捉えて解答する問題。センター試験では毎年出題される形式であり、意味を理解していないと解けない点で、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。(オ)の正解「傾倒」はここでは「ある物事に熱中すること」の意。(ア)～(オ)まで基本～標準レベルの漢字問題なので、正解を選ぶのは容易なはずだ。

- (ア) 丹念 ① 一旦 ② 鍛錬(練) ③ 丹精 ④ 担架 ⑤ 破綻

問2 傍線部説明問題 基礎

- |     |    |      |           |        |        |       |
|-----|----|------|-----------|--------|--------|-------|
| (イ) | 漠然 | ① 麦芽 | ◎ ② 砂(沙)漠 | ③ 呪縛   | ④ 爆笑   | ⑤ 幕末  |
| (ウ) | 響く | ① 供給 | ② 逆境      | ③ 協定   | ◎ ④ 影響 | ⑤ 歩道橋 |
| (エ) | 頻出 | ① 品質 | ② 海浜      | ◎ ③ 頻繁 | ④ 来賓   | ⑤ 貧弱  |
| (オ) | 圧倒 | ① 逃避 | ◎ ② 傾倒    | ③ 唐突   | ④ 周到   | ⑤ 糖分  |

- 正解 (ア)  1  ③ (イ)  2  ② (ウ)  3  ④ (エ)  4  ③ (オ)  5  ②

傍線部A「翻訳家とはみなその意味では楽天家なのだ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

第4段落の最後の一文に引かれた傍線部Aに関する問題。

○傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語が含まれている場合、まずは指示語問題として解く。

この公式通り、ここで傍線部中の「その意味」の「その(の)」が指し示す内容を確認すると、いくつかの語や内容をたどって正解の根拠にたどり着く。

まったく違った文化的背景の中で、まったく違った言語によって書かれた文学作品を、別の言語に訳して、それがまがりなりにも理解されるといふことじたい、よく考えてみると、何か奇跡のようなことではないのか、と。

(翻訳を試みるということは)この奇跡を目指して

心の中のどこかで奇跡を信じているような(楽天家)

翻訳家とはみなその意味（では楽天家）

こうして指示語を正確にたどってみると、傍線部の「翻訳家とはみなその意味では楽天家」であるという意味は、第4段落冒頭の一文に書かれていることがわかる。「まったく違った文化的背景の中で、まったく違った言語によって書かれた文学作品を、別の言語に訳して、それがまがりなりにも理解されるということ」<sup>11</sup>「何か奇跡のようなこと」を可能だと「信じている」翻訳家のことを筆者は「楽天家」と呼んでいる。そうした説明になっている選択肢は④しかなく、これが正解。

④ 言語や文化的背景がどれほど異なる文学作品でも、読者に何とか理解される翻訳が可能だと信じているということ。  
他の選択肢は、指示語の指し示す太字部分に該当する内容にまったく触れていないので全体×。

傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語が含まれている場合は、まずは「指示語問題」という視点で解くようにしたい。

正解 6 ④

問3 傍線部理由説明問題 標準

傍線部B「翻訳というよりは、これはむしろ翻訳を回避する技術なのかも知れない」とあるが、筆者がそのように考える理由として最も適当なものを一つ選べ。

第7段落で、筆者は翻訳の難しさ、特に「日常言語で書かれた小説」を翻訳する難しさについて説明している。しかし楽天的な翻訳家には、戦略は二つあると述べる。一つは一応「直訳」してから注をつけるといったやり方。しかし、このやり方は最近日本で評判が悪いので、二つ目の戦略である近似的な「言い換え」を行うことが多くなっている現状について第8～9段落で具体例を挙げながら説明している。いかにして「日本語として自然」で「こなれた」訳文にするかが翻訳家の腕の見せ所になる、というわけだ。

しかし、この「日本語として自然」で近似的な「言い換え」の翻訳は、「こなれている」と世間では高く評価されるものの、筆者は傍線部の直前で「厳密に言ってこれは本当に翻訳なのだろうか」と疑問を呈している。そして続く傍線部Bで「翻訳というよりは、これはむしろ翻訳を回避する技術なのかも知れない」と述べているように、翻訳家の二つ目の戦略である「日本語として自然」に見える近似的な「言い換え」は、本当の「翻訳を回避

する技術」なのかも知れないとやや批判的な目を向けている。

実はこの問題も、問2に引き続き次の公式で解くべき問題になっている。

○傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語が含まれている場合、まずは指示語問題として解く。

この公式通り、ここで傍線部中の「これ」の指し示す内容を確認していくと、先ほど指摘した箇所にとどり着く。

← 近似的な「言い換え」

← 日本語として自然なもの

← 本当は言わないことをそれらしく言い換えなければならない

← そのように言い換えが上手に行われている訳を世間は「こなれている」として高く評価する

← 厳密に言ってこれは本当に翻訳なのだろうか

← 翻訳というよりは、これは

傍線部中の「これ」で指示されている翻訳の中身をたどっていくと、筆者がここで「本当の翻訳なのだろうか」と疑問を呈しているものは翻訳家の取る二つ目の戦略、つまり「自然」に見える近似的な「言い換え」⇨「こなれた」翻訳のことだとわかる。しかし、筆者はそうした翻訳は、本当の翻訳をする困難さを回避する技術にすぎないと思っっている。そうした説明になっている選択肢は②しかない。

これも問2同様、指示語問題という視点で解くと、選択肢②の中の「近似的に言い換える」「こなれた翻訳」「日本語としての自然さ」に気がつくはずだ。ただ、②の後半の「よりふさわしい訳文を探し求めることの困難に向き合わずに済ませることになるから」という部分は本文に確実な根拠

## 問4 傍線部説明問題 標準

がなく、筆者の考えを推測することになるが、方向的に筆者の主張に沿ったもので特に問題がなく、他の選択肢が②と違って指示語の指し示す内容を正確に含んでいないことも含めて、正解は②以外にない。

一応、消去法を併用するとして、×の箇所を挙げておく。

①は、「日本語のあいまいさを利用して意味をはっきり確定せずに訳す」ことについて、「望ましい」とまで言っておらず、また、「それでは原文の意味が伝わらないこともありえ」という内容は書かれていない。

③は、「直訳に注を付す方法」が「生硬な表現」になるとあるところが×。これは戦略の一つ目に対しての言及である。

④は、「不自然な表現だとしてもそのまま直訳的に翻訳しておくこと」が「翻訳不可能であることを伝える効果を生む」という内容は、ここでの指示語の指し示す内容をまったく無視しているので×。後半も筆者の言いたいことにまったく反している。

⑤は、「文学作品の名訳や先輩翻訳者の成功例などを参考にすること」が指示語の指し示す内容をまったく無視しているので×。

正解 7 ②

傍線部C「正しいか、正しくないか、ということとは、厳密に言えば、そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題に行き着く」とあるが、ここから翻訳についての筆者のどのような考え方がうかがえるか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

空白によって分けられている第13段落以降の内容を読んで解く問題だが、ここは筆者が具体例を挙げて説明している箇所なので、それをきちんと捉えることがポイントになる。

ここで挙げられている例は、「ぼくはあの娘にぞっこんなんだ（前者）」と「私は彼女を深く愛しているのである（後者）」という二つの訳だ。筆者は前者の訳のほうを話し言葉として「自然」であり、後者のような言い方をする日本人はいないとする。ただし、「原文の構造に忠実」だという意味においては、後者の訳が「正しい」のかもしれないと述べている。つまり、傍線部Cにおける「正しいか、正しくないか」の判断は、どの視点で見るとかによって変わってくる可能性があるということになる。

○「正しいか、正しくないか」

- 1 「日本語として自然かどうか」↑前者の視点
- 2 「原文の構造に忠実かどうか」↑後者の視点

しかし、さらに「厳密に言えば」、「そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題に行き着く」としている。つまり、二つの視点以外にも、もつと原理原則的な意味での翻訳というものがあり、それは「そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題に行き着く」ことになる。述べているのである。そうした説明になっているのは②のみで、これが正解。

選択肢が三行に渡っているが、要素に分けて正確にとらえて○×の判断をしていこう。

①は、「意味的にも構造的にも一対一で対応すべき」という学問的な原則に関わるもの」というのは、「後者」の視点であり、「言語哲学の問題」ではないので×。また、後半の「必然的に相反するものになる」という考え方について、筆者の言及はない。

②は、先ほど見た原理原則的な意味での翻訳の問題である「そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題」を「原文の表現を他言語に置き換えるとはどういうことか、あるいはどうあるべきか、という原理的な問い」と説明しており、内容的に問題ない。そして、後半の「原文を自然な日本語に訳すべきか」が前者の視点、「原文の意味や構造に忠実に訳すべきか」が後者の視点の内容と対応しており、OK。そして結論の「翻訳家の向き合う問題は、容易に解決したいものになる」という考え方」も筆者の論の方向性と合致している。これが正解だ。

③は、「翻訳の正しさ」を「いかに自然な日本語に見せることができるか」としているが、これは前者の視点であり、またそれを「翻訳家の技術」としている点も×。以下の説明も間違えている。

④は、「翻訳の正しさ」を「原文を近似的な言葉に置き換えることしかできない」という翻訳の抱える限界に関わるもの」としている点×。これは前者の視点でしか翻訳できなくなってしまう。以下の「時代を超えて通用する表現を目指すべきである」という考え方」という説明も、まったく筆者は述べていない内容だ。

⑤は、「翻訳の正しさ」を「二方向の目的に対する翻訳家の選択に関わるものである」としている点×。前者なのか後者なのかという二択では解決できないもつと本質的な問題が翻訳にはあるというのが筆者の考え方だ。そうした点でも後半の「正確であるとはどういうことか」は学問的に定義して決定していくべきであるという考え方」も間違っている。

正解

8

②



## 問5 本文の趣旨判定問題 応用

次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒が翻訳の仕事について話し合っている場面である。本文の趣旨と異なる発言を一つ選べ。

設問中、「異なる発言」が太字になっていることを見落とさないようにしよう。

それさえ見落とさなければ、この問題は「消去法」で解く方針で臨むことがわかる。ここでは五人の発言を検討し、「本文の趣旨と異なる発言」の箇所を見つけて×をしていく。

まず、①の生徒Aの発言内容はすべて問題ないので通過する。

次に、②の生徒Bの発言中を見ると、「筆者がいうように、時代や文化の違いをなるべく意識させずに読者に理解させることが翻訳の仕事の基本」とあるが、これは問2で見たように翻訳に対して筆者は、「まったく違った文化的背景の中で、まったく違った言語によって書かれた文学作品を、別の言語に訳して、それがまがりなりにも理解されるということ」と定義し、「何か奇跡のようなこと」と判断しているのであって、「時代や文化の違いをなるべく意識させずに読者に理解させること」を「翻訳の仕事の基本」だとは述べていない。そもそも楽天的な翻訳家たちが「時代や文化の違いをなるべく意識させずに読者に理解させる」ことを翻訳の仕事としているなどと書かれているわけでもないで×。これが正解となる。

以下、③～⑤の生徒たちの発言内容はいずれも本文の内容を的確にとらえ、本文の趣旨を理解したうえでのもものになっている。

正解 ⑨ ②

## 問6 文章の表現と構成を問う問題 (i)基礎 (ii)標準

(i)この文章の表現に関する説明として適当でないものを一つ選べ。

設問の「適当でないもの」を見落とさなければ、「消去法」で解ける。

①において取り上げられている第4段落中の「こう」という指示語は、手前を指し示す普通の指示語と違って、「次のように」という意味を表しており、「指示内容がわからない段階で提案を投げかけ」、以下の内容に注目させる点で、「読者の注意を引きつける働きをしている」という説明は正しい。

②のような、「A、いやBということは」という言い換えは、「Aというよりも、Bと言った方が的確だ」という表現法であり、それはAを打ち消

してBを強調することなので、選択肢の説明は正しい。

③は、小説や随想でよくある表現方法。普通漢字で表記するところをあえてカタカナ表記することで、心中語であったり筆者にとって特別な意味を持つ語であったりを示す手法だが、ここでは説明通り「子供時代の感覚を再現するために、カタカナ表記」しているので正しい。

④は、「あの時の少年は一体どんなことを考えただろうか」を「過去の自分が考えたことを回想し」としているところまでは正しいが、「当時を懐かしむ感情」を表しているのではない。本文にもあるように、それから二十年後の自分が翻訳に携わって四苦八苦することになっている現在からかんがみて、**予想外のことが起きる人生と言うものの不可思議さを表している表現といえるものなので×**。これが正解となる。

正解

10

④

(ii)この文章は、空白行によって四つの部分に分けられている。構成に関する説明として最も適当なものを一つ選べ。

段落構成の設問は、基本的に消去法で解く。

①の「1～4段落」部分については、悲観的な翻訳観と楽観的な翻訳観が挙げられているので、「対極的な二つの考え方を示して問題提起し」という説明は正しいが、問2や問3で見たように「支持する立場を一方に確定させている」のではなく、二つの翻訳観の間で揺れ動いていると書かれているので×。

②の「5～9段落」部分については、「『翻訳不可能』な具体例を示して翻訳にまつわる問題点を明確にし」という内容は正しく、さらに問3で見たように第二の戦略として「『言い換え』という別の手法を示して論を広げている」ので×が付かない。すぐさまこれを正解として選ぶのではなく、いったん保留して通過しよう。

③の「10～12段落」部分については、問6(i)でも見たように「過去のエピソードを引用し」ているのは確かだが、「筆者が現在の職業に就くことになったきっかけを紹介し、論を補強している」のではなく、**予想外のことが起きる人生と言うものの不可思議さを表している表現といえるので×**。

④の「13～15段落」は、問4で見たように「翻訳の正しさについて検討し」てはいるが、「筆者の考える正しさを示し」ているわけではない。第14段落の傍線部Cにおける翻訳として「正しいか、正しくないか」の判断は、どの視点で見えるかによって変わってくる可能性があり、さらにいえば「厳密に言えば、そもそも正確な翻訳とは何か」という言語哲学の問題に行き着くことになる。筆者自身が断定していないのはもちろんだが、かといって「結論を読者の判断に委ねている」わけでもないので×。



正解

11

②

②以外は×が付いて確実に消去できるので、正解として②を選ぶ。

## 第2問 小説 上林 暁 「花の精」

## 〔総括〕

今年の小説は五年連続していた女性作家の作品ではなく、昭和の男性作家の作品が出題された。本文は戦前（昭和15年）に発表された上林暁の短編小説「花の精」の一節だが、著者の作品は一九九四年度追試に一度出題されたことがある。分量は昨年よりやや増加した（約四七〇〇字→約四九〇〇字）が、戦前の作品ではあるが私小説作家の小説であり、登場人物もさほど多くないので比較的読みやすい文章といえる。

「私」とその家族（特に「妹」と「妻」）の置かれている状況や友人の〇君との関係性、そしてキーとなる「月見草」をめぐるエピソードとそれに関係する登場人物の心情をきちんと押さえながら読解していきたい。

設問としては、問1の語句の問題では、例年通り「本文中における意味」を問われているが、いずれも「辞書の定義」が正解となる慣用表現であり、語彙力が試された。問2～4は場面の展開に即して主人公やその周りの人物の心情を把握する設問。問3がやや難だが、それ以外は基礎～標準レベル。問5は主人公の心情の推移を探る設問なので、本文を丁寧に読んで解く必要があった。問6は例年通り表現に関する説明問題だが、今年は「適当なもの」を二つ選ぶ出題形式で、選択肢がやや紛らわしい点でやや難レベルで、消去法も使って丁寧に解く必要があった。

## 〔解説〕

## 問1 語句問題 (ア)標準 (イ)基礎 (ウ)応用

傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ一つずつ選べ。

この問題は「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書の定義を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。文脈判断に頼ると間違える可能性がある問題が出題されるので、今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。

(ア)の「お手のもの」は、「得意のもの」の意で、③「得意としていて」が正解。

(イ)の「肚を決めた」は、「腹を決めた」と書く場合が一般的で、意味は「決心する」の意で、ここでは①「気持ちを固めた」が正解。

(ウ)の「目を見張る」は「目を大きく見開く」の意なので、②の「感動して目を見開いていた」が正解である。なんとなくの文脈判断で、他の選択肢を選ばないようにしたい。

問2 心情説明問題 基礎

正解 (ア) 12 ③ (イ) 13 ① (ウ) 14 ②

傍線部A「自分だけ好いところを占領するのは気がひけたので、その一部を割いて、トマトを植えさせた」とあるが、この場面からわかる、妹に対する「私」の気持ちや向き合い方はどのようなものであるか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

まず、「私」と「妹」の置かれている状況を把握する。

○小説で「前書き」が書かれている場合、本文に入る前に、前書きに書かれている人物関係や場面状況をしっかりとらえてから本文読解に入る。

前書きを捉えることは小説読解においては超鉄則だ。

少し時間をかけてもいいので、前書きに書かれている人物関係や場面状況をしっかりとらえてから本文読解に入るようにしよう。

前書きには、「妻が病で入院し長期間不在の『私』の家には三人の子」がいることが書かれており、「妹」についても「夫に先立たれ途方に暮れている妹」とある。つまり、「私」も「妹」も現在とても不遇で悲しい状況に置かれている。そんなある日、「私」にとって心を慰めてくれる存在である「月見草」を、庭師が雑草だと思ってすべて抜いてしまうという事件が起き、「私」は空虚で楽しい暇がない日々を過ごしていた。

そんな中で、「月見草」が抜かれた後の空地に、茄子やトマトを植えることを妹が提案してきた。月見草を失って空虚となった心を紛らわせるために草花の世話をしていた「私」を見た妹が、兄である「私」を元気づけようとして提案したと判断できる。「空地利用しようか!」と「!」マークが文末についているところからも、妹の兄への想いが読み取れる。

そもそも郷里で百姓をしていた妹にとって畑仕事はお手のものだった。しかし、妹とて夫を失って悲しんでいるはずであり、得意な畑仕事をすることで気持ちを盛り上げようとしているカラ元気ともいえるけなげな妹の姿を見た私は、「自分だけ好いところを占領するのは気がひけた」と思うのは自然な流れだろう。設問では、「妹に対する『私』の気持ちや向き合い方はどのようなものであるか」が問われているので、こうした流れをつかめば、正解を選ぶのは難しくない。

①は、前半はいいとしても、「これからは一緒にたくさんの野菜を育てることで落ち込んでいた妹を励まそうとしている」は、本文に書かれていない内容で×。

②は、「妹に接し、気後れしていた」わけではないし、「家族である妹との関わりは失った月見草に代わる新しい慰めになるのではないか」という内容も書かれていない内容で×。本文に書かれていない内容を勝手に正しいと推測して選ぶという主観的な読解はしないようにしたい。

③は、「野菜を植える手慣れた様子に妹の回復の兆しを感じ」は先ほど説明した本文の流れに合致した内容。次の「慰めを求めているのは自分だけではないのだから園芸に適した場所を独占するのは悪いと思い、妹にもそこを使わせる気遣いをしている」というのも過不足ない説明でOK。これが正解。

④は、「自分が庭を一人占めしていることを妹から指摘されたような気持ちになり」は、本文からうかがえない過剰な解釈で×。妹には兄である「私」に何か指摘するような意図はなく、また私も妹に対して「居心地の悪さ」を感じていたと書かれているわけでもない。

⑤は、「何も無い土地に畝を作り、落ち葉を埋める妹の姿に将来の希望を見出したような思いになり」というのは本文に書かれていない内容で勝手な想像、解釈に過ぎない。主観的な読みをしてこの選択肢を選んだ人は、もう一度「客観的な読解」という基本的な姿勢に立ち戻って本文を読みなおしてほしい。

正解 15 ③

### 問3 心情理由説明問題 応用

傍線部B「それは、なんだかよろこばしい図であった。」とあるが、そう感じたのはなぜか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

月見草に対する「私」と「O君」二人の思い入れの有無や対応の違いなどを、23行目から傍線部Bの引かれている65行目までのさまざまなエピソードの内容を読みとって解く問題。月見草の大きな株を持ってきたO君を見て「よろこばしい図」と感じる私の思いを読み解くのだが、やや根拠の薄い問題であり、幅広い箇所の正確な読解が必要なので、本文を根拠にズバリ解くというよりも、「消去法」を併用して×のものを落とし、正解にたどり着く方が確実と言える問題だ。

①は、「いつの間にか月見草に関心をもっていたO君」が本文に根拠がない説明になっている。また「大きな月見草の株とが一緒になった光景は目新しく」というのも、ズレている。ここで「私」が「よろこばしい」と感じた原因は、「目新し」さではなく、O君の行った行動の意外性とその後にある私への思いにあるので×。また、「爽快なもの」というのも、「よろこばしい図」の言い換えとして言い過ぎで×。

②は、月見草に対するO君と私とが対照的であるのは事実だが、私は月見草を「傷つけまい」として少ししかとらなかったという説明の根拠は本

文には見つけられないので×。私は月見草を物色しながら「匂いがするかしらないかを考えて月見草をとってきた」わけであり、特に「傷つけまい」という判断をしているわけではない。また、「よろこばしい図」の説明として、「力強いもの」というのはズレている。

③は、迷う選択肢だ。ここではO君が「短い時間で手際よくたくさん月見草の株を手にして戻ってきた光景」が私にとって「驚くべきもの」であるとしているが、本文ではO君の姿を見たときの反応として、「私も思い切った大きなやつを引けばよかった」とあるように、「大きな株」である点がポイントになっており、「たくさん」と説明している点で△(その点では②も同様。「大きな株」と説明しているのは①と⑤)。また、傍線部Bで、私が「なんだかよろこばしい図」と感じる理由が、O君の「大胆さ」にあるとしても、「自分を鼓舞するような痛快なものだった」というほどのものではない。ここで私が「よろこばしい」と感じたことの説明として「痛快」は言い過ぎだろう。また、選択肢⑤にあるような、自分の思いをO君が理解してくれていたという内容が説明されていない点も不足しているので×。

④は、前半は良いとして、後半の「いかにも月見草に興味がない人の行為のようなほえましいものだった」という解釈はあまりに浅薄だ。傍線部の直後に「私も思い切った大きなやつを引けばよかった」とあるように、O君の月見草に対する意外な行動に対して、私は前向きにとらえて反応している点から考えると、「いかにも月見草に興味がない人の行為」という表面的な判断にとどまっているわけではない。O君と私の心情的なつながりについてまったく触れていない点でも×。

⑤は、前半の「月見草に関心がなく、釣りに夢中だと思っていたO君が月見草の大きな株を手にしていた光景は意外」という説明は本文の事実関係やそこまでの流れを押さえておりOK。後半の「月見草への自分の思いをO君が理解してくれていたと思わせるようなうれいものだったから」という説明も、傍線部の直後の「私も思い切った大きなやつを引けばよかった」という心情へとつながっている点でOK。友人であるO君は、月見草に関心がないように見えて、心の奥底では私のことを本当は心配してくれており(一緒に多摩川べりの是政に出かけたのも私を想ったことと判断できる)、私の目的とした月見草の大きな株を手いっぱい持つてくることで私への想いを表現し、一方の私もそうしたO君の一見不器用に見える行動の背後にある私への優しさや想いを感じ取って嬉しく思い、「なんだかよろこばしい図」と表現している。「月見草」をキーとした二人の行動と心情のやり取りを理解できたかどうか勝負になる。これが正解だ。

ただ、この問題で⑤をいきなり正解とするには本文に根拠が薄いので、⑤以外の選択肢にキズを見つけて×し、消去していくことで正解の⑤を浮かびあがらせていくというやり方の方が確実だろう。

正解

16

⑤

問4 心情説明問題 基礎

傍線部C「突然私は病院にいる妻のことを思い出した」とあるが、この前後の「私」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

まず、ここで「私」の置かれている場面状況を正確にとらえよう。小説における5W1Hの把握はとても重要だ。

○小説読解においては、必ず5W1Hを意識しよう。

「5W1H」とは？

- 1 Who (だれが)
- 2 When (いつ)
- 3 Where (どこで)
- 4 What (なにを)
- 5 Why (なぜ)
- 6 How (どのように)

※場合により、「Whom (誰に)」の一つを付け加えて、「6W1H」と呼ばれることもある。

5W1Hを意識しながら、傍線部Cの前後をまとめてみよう。

- 1 O君と多摩川べりの是政に出かけ、無事に月見草を取って帰る段になった。ところが乗るはずの自動車(ガソリン・カー)が来るまでまだ一時間もありません。暇な私は待合室の入り口から、村を見ていた。
- 2 私はサナトリウムの建物を見つけ、暗かった窓にポツリポツリと灯がつきはじめたのを見た時、傍線部C「突然私は病院にいる妻のことを思い出した」。
- 3 そして、今はそばにいない妻のことを思い出して心配しているうちに「寂しさがこみあげて来た」私は、「O君を一人残して、サナトリウムの方



へ歩いて行った」。その理由は「妻もこのサナトリウムに住んでいるかの如き気持」がしたからである。

4 人の住む気配を感じながらサナトリウムの前を通り過ぎる時も「妻よ、安らかなれ」と「胸のなかで」言いながら、「私は感傷的で、涙が溢れそう」になった。

以上のような流れをつかんで選択肢を見ていこう。

①は、「忘れようと努めていた妻の不在がふと思い出されて絶望的な思いになった」が×。そうした記述は本文にはない。

②は、前半の「サナトリウムの建物に灯がともり始めたのを見て、離れた地で入院中の妻のことが急に頭に浮かび、その不在を感じた」が傍線部の前までの1～3までの流れを押さえていてOK。「妻がすぐそこにいるような思いにかられて建物に近づき」「人々の生活の気配を感じるうちに妻のことを改めて意識して、その平穏を願い胸がいっぱいになっている」という説明も、本文の87行目からの段落の内容に合致している。これが正解。

③は、一文目の説明は良いとしても、二文目の「しかし、あまり思わしくない妻の病状を考え、現実との落差に対する失望感から泣き出しそうな思いになっている」という説明が×。妻の病状は思わしくないかもしれないが、「現実との落差に対する失望感」を感じて「泣き出しそうな思いになっている」という記述は本文にはない。

④も、一文目の説明は良いとしても、二文目の「朝から月見草をめぐる自分の心の空虚さにこだわり、妻の病を忘れていたことに罪悪感を覚え、妻への申し訳なさと頭がいっぱいになっている」という説明が×。「自分の心の空虚さにこだわり、妻の病を忘れていた」という根拠が本文になく、さらにそれを「罪悪感」と感じているとも取れない。

⑤は、「サナトリウムの建物が骸骨のように見えたことで、療養中の妻のことをにわかに意識するようになった」の説明が事実関係と違っており×。また、「その感情が是政駅で感じた寒さや疲労と結びついて、妻がいつまでも退院できないのではないかと不安がふくらみ」という説明も本文の内容からまったく取れない。

本文読解をベースにして正解の②を選ぶのは難しくないが、必ず消去法で他の選択肢を×するという確認を怠らないようにしましょう。

正解 17 ②

問5 心情説明問題 応用

傍線部 D 「それはまるで花の天国のようであった。」とあるが、ここに至るまでの月見草に関わる「私」の心の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

ここも問 4 と同様、まず 5 W 1 H をしっかり把握して読解していこう。

- 1 サナトリウムの前を通り過ぎながら妻のことを想って「感傷的で、涙が溢れそう」になっていた私だが、目の前に今咲いたばかりの月見草の果てしない群落を見つけ、「涙など一遍に引っ込んで」しまうくらい感動を覚える。
- 2 暫く佇んで月見草の咲く群れを見ていたが、ガソリン・ケアが来る時間なので、O 君の待つ是政駅へと戻り、ガソリン・ケアに乗り込んだ。
- 3 ガソリン・ケアが走ってゆく前方は、ヘッドライトに照らし出されては後ろに消えていく月見草の花がひっきりなしに続く「すべて一面、月見草の原」であり、私はそれを見て「息を呑」み、傍線部 D 「それはまるで花の天国のようであった。」という感想を抱く。

次に、傍線部 D 中の「まるで花の天国のようであった」という比喩（直喩）表現が何を意味しているかを考えながら選択肢を見ていこう。

①は、「是政の駅に戻る途中で目にした、今咲いたばかりの月見草の群れは、どこまでも果てしなく広がるようで、自分の感傷を吹き飛ばすほどのものだった」という説明は先ほど見た 1 の内容に合致する。「さらに武蔵境へ向かう車中で見た、三方から光の中に現れては闇に消えていく一面の月見草の花によって」の説明も 3 の内容に合致する。そして、傍線部の「まるで花の天国のようであった」という比喩の説明として、選択肢の後半で「憂いや心労に満ちた日常から自分が解放されるように感じた」と書かれている点に関しては、目の前に続く月見草の原を見た「私」は、それを辛い日常から解放される「天国（并非日常の世界）」と感じたと判断できるので OK。これが正解だが、残りも必ず消去しておこう。

②は、一文目の説明はなんとか事実関係として OK だとしても、二文目の「庭に月見草が復活する」という確信を得た」という説明は、ここでの「花の天国」の説明としては不適で×。

③は、一文目の説明は OK だとしても、二文目の「妻の病も回復に向かうだろうという希望をもった」の箇所が×。ここでは「妻」の存在は無関係だ。

④は、一文目の説明は OK だとしても、二文目の「月見草に死後の世界のイメージを感じ取り」や「毎夜このような光景を見ている運転手は死に魅入られてしまうのではないかと想像した」という内容は、「花の天国」という筆者にとってプラスの価値観を持つ捉え方と反対の方向性なので×。

⑤は、一文目の説明はOKだとしても、二文目の「自分と妻の将来に明るい幸福を予感させてくれた」は③の選択肢と同様、ここでは無関係な妻について触れているので×。

正解 18 ①

問6 表現の特徴・叙述の説明問題 応用

この文章の表現に関する説明として適当なものを二つ選べ。(順不同)

「適当なもの」を選ぶ問題だが、ここでは「消去法」で解いていこう。

○センター小説の「文章の表現に関する説明」問題の解法

選択肢中の「○行目の『○○』は」の箇所は正しいので、とにかく指示された該当行に戻って本文を読み、選択肢に書かれている判断が正しいかどうかを検討し、○×(時に△)をつけて「消去法」で解いていこう。

また、「二つ選べ」とある場合は、一つは易しく、もう一つが難しい、という場合が多いので、特に二つ目の正解を選ぶとき、もう一度すべての選択肢を見直すことを忘れないようにしよう。

①は、「菜園を始める際の会話部分をテンポよく描き」までの説明はOKだが、「妹の快活な性格」という説明に？が付く。夫を失った妹は、ここで兄である私の心を慰めるために菜園を始める提案をするが、それは妹の得意分野であるということが前提であり、兄を慰めるためのカラ元気レベルの発言といえるもので、「妹の快活な性格」といえるほどの根拠は本文に見当たらない。ただ、この選択肢はいきなり×はできないので、△で通過しておく。

②の「体言止めの繰り返し」によって起こる表現上のメリットは、「リズムが整ったり、テンポが良くなったりする」ことであって、「印象深い記憶であったことを強調」するという効果はないので×。

③は、「カタカナ表記の擬音語・擬態語を使うこと」で「緊迫感を高めている」という表現効果が起きる場合もあるが、ここで指摘されている該当箇所を見ると、車外の風景描写としての効果であったり、灯が次第について行くことを印象づけるものであったり、孤独感を表していたりするもので

あったりしているのであって、説明のように「緊迫感を高めている」わけではないので×。

④の選択肢の取捨が非常に難しい。小説や随想(随筆)において、具体的な事物がキーワード化して、そこに筆者や主人公などの心情が込められたり反映されたりするということは表現として常套手段といえる。ここでは「月見草」がそのキーワードにあたる。説明のように、「44・45行目や、60行目における月見草の匂いの有無に関する叙述」があることは事実だ。しかしそれが「110行目の、『私』が網棚から月見草を下ろすときに『ぶんとかぐわしい香りがした』という嗅覚体験を際立たせる表現となっている」かどうかは、はっきり言って判断しづらい。これも△で通過する。

⑤の説明にある75行目「疲れていた。寒かった。おなか为空いていた。」という部分は、『私』の状況が次第に悪化していく過程を強調する表現』とは言えないので×。ここでは、「疲れていた」≠「寒かった」≠「おなか为空いていた」と三つ並列関係にあると捉えるべきで、それらを畳み掛けることで「私」の状況が良くないことをよりの確に表しているが、「次第に悪化」しているわけではない。

⑥で指摘されている「ように」を用いた比喻(直喩)表現の効果を、『私』の心理を間接的に表現している」という説明は問題ない。私を感じた暗いサナトリウムの不気味さを「骸骨のように」とたとえ、今開いたばかりの月見草が私を歓迎してくれている様子を「私を迎えるように」とたとえている。これは確実に正解と判断できる。

さて、△にしておいた①と④の判断だが、①の妹に関して前書きと本文に書かれている箇所を拾っていくと、「夫に先立たれ途方に暮れている妹」「小さな菜園だが、作りはじめると、妹は急に生き生きとして来た」「菜園の世話をしていれば、途方にくれた思いも、一と時忘れることが出来、心が慰まるからにちがいない」「遣り場のない思いを、慰め、紛らそうがため」などが見つかる。この描写から考えて、妹の発言に「ー」が使われていたり述語が省略されたりしていることはテンポの良さにはつながっていても、「妹の快活な性格」を表現していると判断するのは難しい。

一方の④だが、キーワードにあたる「月見草」は私にとって心慰めてくれる重要なものであり、問5の正解①にあるように「憂いや心労に満ちた日常から自分が解放されるように感じ」させてくれるものといえる。そうした点で、「月見草」は視覚的な要素だけでなく、嗅覚的な要素においても私にとって重要であることは、本文最後の段落を読んでも明らかだ。「嗅覚体験を際立たせる表現」という点にやや疑問符がつくものの、こちらを二つ目の正解として選ぶことにする。

正解 19・20 ④・⑥ (順不同)